

# 末法の信行は但行礼拝

(愛知県泉龍寺前任職)

服部 即明

失礼致します。尾張の服部でございますが、泉龍寺前任職でございます。ただいまは隠居の身でございます。お寺からは離れまして、田舎の、在家の家に居住をしております。太鼓を叩きまして、初めて居住します町、田舎の町でございますが、地理が分からないままに歩き始めておる所でございます。私の、退寺記念に出しました本でございますが、『不輕品の行者日蓮聖人』という本を、読んでいただけた方も、たくさんあるんだろうと思いますが、この本で私が申し上げたかったことは、三大秘法の誤りでございます。日蓮聖人のご真蹟のある、或いはかつてあった御書の中には、一大秘法はございますが、三大秘法はございません。七〇〇年来、日蓮宗に限らず、創価学会も含めまして、三大秘法という大きな誤りをしてまいったと思うのでございます。これは三つの秘法ではございますが、三大秘法という所に大きな誤りの元があったと思うのでございます。論理的に申しまして、釈尊から引き継がれた秘法は一大秘法でございます。日蓮聖人は、それを三つに分けて解説なさったに過ぎません。ですから御書には、三つの法門、という風に述べられていることは皆様もよくご承知のことと思います。この一大秘法と、三つの法門の、どかが違うか、これがこの書の肝心でございます。七〇〇年来間違えてきたことを、一大秘法という大法に統一して、信行しなければならぬんじゃないか、ということが私の問題提起でございます。勸学院へ、再三、五回くらい、論文として出しました。認定をされません。前の院長でございました浅井円道先生は、これでよろしいと言ってくれたんですけれども、何に致しまして十七人の審査の先生の目を通らなければ、合格しないのでございます。十回くら

書き直しました。その結果がこの本として結晶致しました。これで私の役割は終えるというつもりで出版をさせていただきました。最初に伊藤立教主任から、創価学会の批判という発表がございました。私、この三月でしたか、現宗研から活字化されました、小樽問答のあの様子を拝見致しまして、何故室住一妙先生が閉口してしまったのか、この謎が分かりませんでしたけれども、あのテープ起こしからの記録を読みまして、室住先生は、創価学会に野次り倒されましてもう言葉が出なくなってしまった、あの様子が目に浮かんだのでございます。皆様方も、毎日ご本尊様を拝んでいらつしやるはずでございますが、仏像になったご本尊でも、大曼荼羅ご本尊でも、これをどのように拝んでいらつしやるでしょう。私も近年まで外に拝んでおりました。色々な所作を通してご本尊を礼拝をし、これをいつも外に見ておったわけですね。それではダメなんですね。一大秘法のお題目にはなりません。本尊が本尊だけ別個に存在する。信行されるということでは、日蓮聖人の宗教が誤ってしまうという風に思うのでございます。本尊が、本尊を拝むことによつて、私達の内心に取り込まれ、そして、お題目が、口から心から身体を通じて、唱えられることによりまして、あの、身体を通じて唱えるというとな、私も最近まで誤解をしておりました。湯川日淳上人の唱題行、これに大変惚れ込みまして、何年も修行をさせていただきました。大阪でこの唱題行の研修会が行われました時に、大阪のほうのお寺さんが質問をされました。身読、身で読むということは、どうなっているんでしょうか。ご承知のように、口でお題目を何百遍何千遍何万遍と唱えます。けれども、身にはどうやって唱えるんですか。そうしましたら、求道同願会の説明ですね、私共は、身・口・意三業にお唱えしておるつもりでございます。口唱だけではございません、というお答えでございました。身・口・意三業に口で唱えてるんですね。これを身唱と言えましょうか。口唱でしかない。客観的に見まして。身唱は、身・口・意三業に唱えているという、そんな観念的なものでは、ないはずでございます。身体で本当に唱えるということはどういうことか。これが、私の本では、但行礼拝でございます。これこそが、お題目を身に唱えるということであろうということでございます。室住一妙先生が、創価学会の会

員達の、もう殆ど大部分が創価学会の会員ですね、口々に野次っております。おい坊主どうしたんだ、狐拝んどつてどうするんだ。あの、野次に入っております。身延山では狐を拝んでるじゃないか。あれが本尊か、つてですね。室住一妙先生がもう悔しくて悔しくて、目から涙、鼻から鼻水、もう、身体のあらゆる細胞から悔し涙を流して声にならない。もう一人、法華宗のほうのお寺さんは割合に冷静な回答をしていらつしゃいます。室住先生は言葉になっていません。これは、あの当時の、昭和三十年頃の日蓮宗の、しかも、日蓮聖人に直参する宗学を唱えられた、室住一妙先生も、まだ一大秘法になっていなかったからではないかという風に思います。一大秘法で本尊を論じた時に、どこが三大秘法のご本尊と違うのか、三大秘法では、外に拝んでいます。一大秘法のご本尊であれば、我々の心の中に、ご本尊が入っていないんじゃないはずでございます。そしてそれが、信行として、身で唱えるお題目として外に表れ出てくるはずでございます。こういう、本当のご修行にならなければ、日蓮宗の未来はあるまい、という風に思っ書いた本でございます。昨日もある方と夜、二時間ばかり、この本についてお話を致しました。その方は、私の本の文字よりも、その方の書き込んだ文字のほうが、多いですね、いっぱい書き込んでいました。そして二時間延々と話しました。もう、もっと続く所であったんですけれども、もう店を閉めます、どうぞお引き取り下さい、と請求をされました。会談を終わりました。ほんとに真剣に読んでくださる方があるんだなと思っ感激致しました。どうぞ、私の言わんとする所をその本でお読み取りください。どうもありがとうございました。